

東日本大震災から6か月… がんばろう日本！

3月11日に起きた東日本大震災。あれから約6か月。この震災に対し、世界各国から多くの物資、義援金などの物的支援、ボランティアなど人的支援が現在も行われています。

福岡県では、職員の被災地支援派遣を合同で行なっています。これに、須恵町も4人の職員を派遣しました。(7月末現在) 福岡県チームの派遣地は、宮城県東松島市です。また、保健師は、石巻市へと派遣されました。「がんばろう日本」「絆」

この言葉を合言葉に被災地は、一歩一歩少しずつ復興に向けて進みだしています。報道などではなかなか聞くことのできない様子や住民とのふれあいなど、被災地に派遣された4人の職員に話を伺いました。そして、「もし災害が起こったら」を考えてみましょう。

黒川忠敬(総務課)
合同第3陣(5月9日〜17日)



沿岸部は壊滅状態。廃墟と化した街を海鳥の鳴き声だけが響いていたのが印象的でした。現地では、義援金、弔慰金、がれきの撤去などの申請に係る説明、DNA鑑定で来庁した人を遺体安置所へ案内するなどの業務でした。ご遺族から聞き取る被災時の話は、筆舌に尽くしがたいものでした。しかし、その状況下でも被災者の懸命に生き抜こうとする姿に目頭が熱くなるのがたびたびあり、また、勇気づけられました。被災地を後にするときは、後ろ髪を引かれるようチーム全員涙が止まりませんでした。

小山田潤(総務課)
合同第9陣(6月14日〜6月22日)



被災地は、言葉を失うほどの光景が広がっていました。災害支援全般を行う震災復興対策室配属で、電話相談、支援物資の搬入作業などの業務を行いました。「この先どうしたら良いか」などの相談も多く、時には、気が滅入りそうになりました。しかし、「今日から新しい生活ができる。ありがとう」と感謝の言葉をもらうと励みになりました。被災された市役所職員は、疲れが見えましたが、笑顔で仕事をしていました。被災された人たちの強さを感じました。復興までにはかなりの時間がかかります。また支援に行って被災者の力になりたいです。

船井弘喜(まちづくり課)
合同第12陣(7月10日〜7月20日)



破壊された住居やゴミの山が数多くあり、ヘドロの匂いとハエの多さに驚きました。現地では、民間賃貸住宅の応急仮設住宅業務を担当し、被災者への説明、申請、受付業務を行いました。「支援金の入金が遅れている。どうやって生きていけばいいの？」などの声もあり、ショックを受けました。一方、「ありがとう」の言葉をたくさんいただき励みになりました。東松島市長は、「私たちは恩返しはできませんが、自分たちがこの東松島市の復興をやったんだ！という思いを持ち帰ってください。」と言われ、一人ずつ握手をされました。短期間の行政支援でしたが、行政職としての責任とやりがいを感じました。

梅野建女(健康福祉課)
福岡県保健師派遣第22陣
(石巻市へ)(7月17日〜7月25日)



市中心部の道路の陥没、瓦礫の山に絶句しました。石巻市役所の要請を受け、4人のチームで避難所や仮設住宅での健康状況調査、健康相談会スタッフとして活動し、100人以上の人たちの相談を受けました。家族や家や仕事を失い、幼児から高齢者まで、どの世代も身体や精神状態の不調で、疲れやストレスで体調を崩している人が多く、心のケアは重要だと感じました。家族や友人との絆、住居、仕事がある日常の「当たり前」の生活が貴重だと改めて感じました。被災地の一日も早い復興を願います。

災害が起こる前に防災グッズや避難経路などの確認を

福岡県では、平成17年の西方沖地震を最後に大きな地震は起こっていません。地震、津波による被害も少ないと言われています。

しかし、災害は、地震や津波だけではなく、大雨による洪水や土砂崩れ、台風などの災害もあります。須恵町には山や川もあります。

もし、集中豪雨が発生し、須恵川が氾濫したら？ 裏山が崩れてきたら？ 平成21年に起こった集中豪雨では、

避難経路などの確認を

篠栗町で2人が犠牲になったことを記憶されている人も多いと思います。過去に発生した以上の「想定外」の災害が起こらないとも限りません。また、災害は必ずしも防ぐことはできません。その被害をできるだけ小さく…、それが減災です。

地域や家庭でもう一度、防災グッズ、避難経路、避難所などを確認し、「もし、災害が起こったら」を想定して話をしてみよう。

